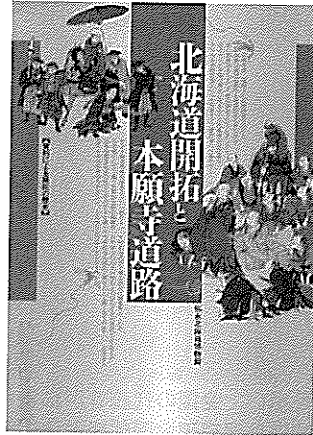


点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No.17

1994
平成6年



北海道「開教」百年
『北海道開拓と本願寺道路』をめぐる(上)

北海道教区の支援を受けて弥永北海道博物館から発刊された『北海道開拓と本願寺道路』

一九九四年(平成6)八月十八日、アイヌ解放同盟ならびに北海道ウタリ協会(現アイヌ協会)札幌支部と、北海道教区、同和推進本部(現解放運動推進本部)との間で「確認会」

が開かれた。これは、同年三月に発刊された『北海道開拓と本願寺道路—資料による開拓の歴史—』をめぐる問題提起されたアイヌ民族の願いを真摯に受け止めていく場として開かれた。

本書は、弥永北海道博物館の館長から明治期の北海道開拓と東本願寺関係資料の図録を作りたいとの相談を受け、これを教区が了承し、企画編集を依頼したことが発刊の契機となっている。

教区は一四〇万円の予算を組み、明治の時代をつぶさに図録で記した本書に対して、「まこと

に慶賀に堪えない」との言葉を寄せ、全寺院に無償配布した。

しかし、発刊直後から教区内僧侶、アイヌ民族に関する人権啓発写真展実行委員会から、掲載内容に対して問題性を指摘する連絡が相次いだ。

その要点は、アイヌ民族にとっては差別絵である『東本願寺北海道開拓錦絵』(以下、「錦絵」)が、何の説明もなく、「開拓」を賛美する文章と共に掲載されていることに集中した。

教区と同和推進本部は協議を重ね、連携を密にして対応していくことを確認し、早急に本書に対する問題提起を直接聞く機会を設けることとしたのである。

正副議長をはじめ教区教化委員など教区の要職者が出席した「確認会」では、「錦絵」に対する指摘が中心となった。

「この絵の中にはたくさんアイヌ民族が描かれているが、そのほとんどが和人に土下座し、労働させられている。対等な姿に描かれているものは一枚もない。添えられている言葉にも多くの差別的な言葉がある。」あなた方にとっては高い所から酒を注いでアイヌ

民族を土下座させ、自分たちの宗教にひれ伏させているこの絵は、心地よい絵かもしれないが、私たちににとっては思わず目を背けたくなる極めて不快な絵である。そのことが解ってもらえるか。」

『北海道開拓と本願寺道路』に一貫しているのは、北海道の歴史を語りながら、先に住む人々であるアイヌ民族が生身の人間として生きていくという気配を全く感じさせない空気である。

確認会では「開拓」とは、未開地を開くということだろうが、私たちににとっては開かれていた。「開教」とは宗教のないところに教えをひろめていくことだろうが、あったものをなくしたのは、あなたたちではないか」との言葉が突きつけられた。

年配の女性は、本書を目の前に置いて、「私たちが苦しんでいるのを見て、自分自身でおかしいと思わないのか」と語り、隣人の存在を見ようとしないうまま北海道の歴史を捉えた宗門人の姿勢そのものを深く問いかけた。

「開拓・開教」を問ひ直す営為は、アイヌ民族の怒りと悲しみの声によって、具体的な動きへとつながられていく。

(速水 馨)